よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 129

山形のお寺での話。このお寺は、跡取りが女性、つまり「住職」で、旦那さんは農業をされているが、縁があって彼女と結婚し、お寺に入った。だから彼が「坊守」さんになった。冬のある日。彼が本堂の屋根に登って雪かきに精を出していた。ところが、ふと下を見ると彼女が泣いているように見えた。彼は不審に思い、屋根から降りて彼女のもとへ駆け寄った。そして「どうしたんだ？」と尋ねた。すると彼女は「あなたが私と結婚しなければ、こんな苦労をしなくてもよかったのに。そう思ったら、申し訳なくて悲しくて」と涙を流していたという。私はこの話を聞いたとき、これこそ〈真宗〉のあるべき結婚観だと直感した。結婚とは、伴侶と結婚することによって、伴侶の人生を変えてしまうことだ。だから自分と結婚しなければ、伴侶がこんな苦労をすることもない。彼女は伴侶に苦労を掛ける縁をつくってしまったことを悔やみ詫びている。これは「加害者の自覚」である。〈真宗〉で言うところの「悪人の自覚」だ。夫婦がお互いに「加害者」の関係に入る。これこそ結婚生活に〈真宗〉が具体的に現れた姿である。この話は、今回執筆いただいた奥山さんからお聞きした話だ。これは結婚ばかりでなく、あらゆる人間関係の基本形に違いない。

まだ見ぬ〈真・宗〉

武田　釋定光（住職）

■知りたい生き物■

私は、この文章を誰に向かって書いているのか。それが分からない。門徒さんに向かってか、誰に向かってか、それが分からない。手紙であれば、誰に向かって書いているのかは明確に意識できるのだが、このような文章には仮想の相手がいない。だから、誰に向かってか、どこに向かってかが分からない。

そうなると、自己の深淵に向かって降りていくしかなくなる。それは阿弥陀さん〈降りていく階段であり、まだ見たことのない〈真・宗〉〉への道程でもある。

人間は、「知の生き物」だから、常に何かを知りたいと欲求している生き物である。分かりたいのだ。分かって満足し安心したいのだ。そうやって、私は〈真・宗〉を知って、分かったことにした。しかし面白いもので、すでに分かってしまったものに対して、人間はトキメキを感じないように出来ている。竹田青嗣さんは、それを「エロス逓減の法則」と呼んだ。エロスとは、単に性的な意味でなく、知的欲求や感情的欲求のすべてを包んだものを意味している。ひとはエロスを満たしたくてあくせくするが、よしんば、そのエロスが満たされたとしても、一時的な満足感は得られるものの、エロスは徐々に減少していく。

〈真・宗〉という得たいの知れないものに取り憑かれてきたが、その繰り返しのように思う。つまり、分からないから知りたい、そして右往左往しながら知ってしまう。しかし知ったものに対してはエロスを感じなくなり、再び出発点に戻される。でも、そこに留まってはいられないから、再び知りたい分かりたいと欲動する。

どうも〈真・宗〉は、そうやってひとを振り回し、結果的には「分からないという地平」へ揺り戻す運動のようだ。〈真・宗〉はひとを教育して、知的満足を与えたいのだ。しかし満足を与えたら、そこに安住してしまいトキメキが起こらないことも知っている。だから、決して正体を見せない。正体を見せないのは、人間を困らせるためではなく、人間にトキメキを与え続けたいからだ。

■ディフィカルトかインポッシブルか■

親鸞が「正信偈」で「信楽受持甚以難　難中之難無過斯」（信楽受持すること、はなはだもって難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし）と述べたのは、その正体を見破ったからだろう。「信楽」とは「他力の信心」のことだが、それを得ることが最も難しい。難しいといっても、これほど難しいことはないと言っている。表面的に読めばこの「難」は、ディフィカルトdifficult(困難)だが、ほんとうはインポッシブルimpossible(不可能)という意味だ。ディフィカルトに読むと、とても人間には獲得することができない至難の業で、我々には獲得することができないが、さすがに親鸞聖人だから得られたのだと理解する。

この理解は、自分の力を過信した理解だ。得られないから自分の努力が足りない、自分の素質が悪いからと、絶望感に落ち込むのは、自分を過信しているからだ。やり方や努力次第では自分にも得ることができるというエロスが潜んでいる。

しかしインポッシブルという理解だと、もはや努力や素質という次元

を完全に超えてしまっているので、絶望感には結びつかない。つまり、まったく知ることができない、手も足も出ないという解放感だ。それを『歎異抄』(第一六条)では、「ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なること、つねはおもいいだしまいらすべし」と歌っている。この「ただほれぼれと」が、何とも言えず素晴しい表現ではないか。

同じく『歎異抄』は、「われらが、身の罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえる」(後序)と述べている。何でも知っているような顔をしているけれども、自分自身の罪深さなどこれっぱかりも知らず、また如来の御恩を、さも分かっているような顔をしているが、本当はそんなこともまったく知らないで迷っていると。

如来の気高さになどに指一本も触れていないという批判は分かるが、自分自身の罪深さにについてもまったく分かっていないと批判している。これが「ただほれぼれと」というトキメキの内容だ。簡単に言えば、「自分自身」とは自分にとって、まったくの不可解な存在ということだ。

そうやって「自分自身」をいただき直させるものが〈真・宗〉という運動なのだろう。だから〈真・宗〉は自分にとって、つねに不可解そのものでなければならない。不可解だからこそ、新鮮な〈真・宗〉に出会い続けられる。

■「本当には知らない」という自覚法■

人間が知ってしまった「知」は、腐っていく。なんのトキメキも感じられなくなる。それを打ち破って、新鮮な〈真・宗〉と出遇い続けていく。それが、まだ誰も見たことのない〈真・宗〉である。

自分ほど恐ろしいものはない。自分の受け止め方ひとつで、相手が敵にもなれば味方にもなる。まだ相手が問題のうちはよいが、自分自身が敵になることもある。自分の都合に合っていればよいが、自分の都合に合わない自分自身が出てきたとき、自分に敵対するものになる。それは「尭の真実」としての「老病死」だ。「老病死」が自分自身に対して、牙を剥いてくる。

この牙から逃れる方法はたったひとつしかない。それは「老病死」を「本当には知らない」という自覚法だ。「本当には知らない」というのは、インポッシブルという意味だ。「老病死」を本当に知ることは不可能だ。

ところがみんな「老病死」を知っているという「知」に執われいる。世間はコロナで大騒ぎだが、コロナがなくても日本人は年間に百三十七万人以上が亡くなっている。死の根本原因は「誕生」以外にはないからだ。だから、コロナを絶滅しても問題は残ったままだ。それだから、「本当に老病死を知っているのか」と阿弥陀さんは問いかける。

■「おおそらごと」という批判■

親鸞は「よしあしのもじをもしらぬひとはみな　まことのこころなりけるを　善悪の字しりがおはおおそらごとのかたちなり」(和讃)と述べている。「よしあしのもじをもしらぬひと」とは、非知識階級のひとではなく、煎じ詰めれば阿弥陀如来のことである。「まことのこころ」はどんな人間にも成り立たないから。一方の「善悪の字しりがお」は「善悪の字、知り顔」のことで、相対的価値観に執われいるひとのことだ。これも煎じ詰めれば「老病死」という価値観を、間違いないと錯覚しているひとのことだ。それは「おおそらごと」だと親鸞は批判する。

まあ批判している当の親鸞も、「おおそらごと」の側にいるのだが。「おおそらごと」と絶対批判できるのは阿弥陀さんだけだから。

だから〈真・宗〉と何十年関わっても、「まだ見ぬ〈真・宗〉」なのだ。見たと思ったら、それが〈真・宗〉と絶縁する時なのだ。

私の宝物

山口　喜美子（石川県小松市）

私達「雑光の会」の年一回の公開講座に武田先生を講師として来て頂いた時からのご縁です。因速寺機関誌『よびごえ』一〇九号からです。毎回毎回、武田美輪さん（因速寺坊守）の表紙絵がとても勉強になります。真似して書いたりしてます。

「よびごえ」に文章依頼の手紙が届いた時にはびっくりしました。私なりに思っている事を書かせて頂きます。

昔ですと仏法のことを知っているのは坊さんで、在家の人はそれを聞かねばならないというような形になっていたものですが、今日では変わってきて、あべこべになっている様に思います。昔の人は『真宗聖典』なんか持って歩かなかった様に思います。

私は現在七十歳。小さい頃から町でお講があり、祖父母に連れられお参りしたものです。家では囲炉裏を囲んで近所のおじじが仏法のお話しをなされてました。「後生の一大事」の事を盛んに言っておられたものを覚えています。何の事かさっぱりわからんまま横に座って聞いていました。なにしろ死んだら極楽にいかせてもらえるように。極楽に行くにはまず、親の言われる事を聞いて、かたいもん（賢い人間）になる事。それればかり聞かされました。悪い事をしたら地獄に落ちると。お参りにいって、いいもんにならんなんと。今思えば道徳にちょっと毛が生えるぐらいの捉え方でしか聞いていなかった様に思います。お説教する人もそんな感じでした。

二十代の頃にはあそこにいい先生がおいでになるからと聞き、仕事の合い間には聞法に出かける日々でした。友人が『真宗聖典』をもっていろんな言葉を覚えて、私に語ってくれました。私は羨ましくて、私もそうなりたくて聖典を開いては閉じ開いては閉じ、机に向かって勉強してました。でもチンプンカンプン。難しくて頭に入りませんでした。すぐにやめました。そこで聞いた言葉が「おぼえてもだめやぞ、わかってもだめやぞ」と。なんと素敵な言葉だと。それ以来『聖典』を持つことをやめました。

三十代半ば頃に、近所のおばばに言われました。本当の話が聞きたければ大聖寺の南郷の和田稠先生のお話し聞いたらどうやという事で、初めて和田先生の浄泉寺に行ったのです。そこで初めて親鸞さんのお話を聞いたのです。それはそれは私の人生の中の一大事でした。その時の事は今でもはっきり覚えています。「自力の心をふりすてて」という仏教を学びながら、煩悩をなくしようといつまでも相撲をとっておるんだ。なくなりやせんのです。それをなくなったと思い込んでみたり、どうせなくならないならと、やけっぱちになったり、どっちにしても相撲をとっとる。だからそういうもんは、なんぼ起きてもいいから、それはほっとけというんです。そんなもん起きるようにできとる。「罪悪深重、煩悩具足の凡夫」と、ちゃんとそうなっとる。なっとるからほっとけと言うとる。だから自力の心をふりすてて、一心に弥陀たのめと。弥陀をたのむ事が大事であって、自力の心をなくす事が大事ではないんだ。本願に乗託する。南無阿弥陀仏ですくわれる。南無阿弥陀仏を解釈し説明してすくわれるのではないと。主人と二人で顔を見合わせて頷いた事を思い出します。この話が私を聞法の場へと足を

運ばせているのだと思います。聞かねばならない事を聞いてしまったという感じです。逃げられません。

　このコロナ禍の中で聞法の場が減っています。小松教務所で春の法要、真宗本廟お待ち受け大会。本廟創立七百五十年記念大会のライブ配信があるとの事で参加しました。途中から画像が乱れ最後には音声だけでした。とてもがっかりしました。「京都まで行かんでいいし、楽でいいわ、結構や」と初めはみんなで「そうやそうや」と喜んでいたのですが、終わってみれば、「ああやっぱりその場に身を置いて聞く事やなぁ」と口々に言って帰りました。不要不急の外出は避けてとよく言われますが、何が不要不急なのか、いったい私達は何を急要としているのか。また問いが生まれました。

　もっともっと悩まねばなりません。人類のいろんな問題が圧しかかってきています。やすっぽい喜びと安心感にひたるような信仰に逃げる事はできません。むしろそういうやすっぽい信仰をうち破っていくのが浄土真宗だと思います。この浄土真宗に出遇えた事が私の宝物です。最後になりますが、和田稠先生から頂いた言葉を紹介したいと思います。

どうぞ
念仏する身になってくれ
そして
人間として　帰るべき世界
お浄土へ帰ってくれ
という事を
お浄土へ行かれた方が
お浄土から
毎日　毎日　お念仏となって
私に呼びかけ
私を促し
私に寄りそってくださる
私が求めるというよりも
私が求める先に
私の方が　求められておったのだ
南無阿弥陀仏
念仏　忘れちゃいかんよ

■私が「雑光の会」へ伺ったのは二〇一六年六月でした。この会は門徒の方々が自主的に創られた集まりだそうです。さすがに北陸は真宗王国と呼ばれるほどに〈真宗〉の徳が染み込んでいるところだと感心しました。山口さんに「よびごえ」誌を送ると、毎回、絵手紙で感想を送って下さいます。またその感想が赤裸々で、これは原稿をお願いしなくてはと思い立った次第です。しかし、山口さんも和田先生にご縁を頂いたのですね。和田先生にご縁を頂かれたかたは多いですね。私も先生のお話は伺ったことがあります。一番印象的なお話は「私自身が靖国です」と言われたことです。靖国神社を敵対視して反戦を論じる方が多い中で、先生は、「自分自身の体質が靖国を生む体質です」と、自分の内部にご覧になられたことです。これが〈真宗〉を生きられた仏者の表現だと感銘を受けました。外にある問題を自分と切り離すのではなく、つねに自己の内部のこととして受け止める。やはり「この世」は自分の内部が無限に噴出し、展開した世界なのです。　住職

阿弥陀さんとお友達

奥山　賀子（山形県尾花沢市）

私は寺の長女として生まれた。主人と結婚し寺を継ぐこととなった時、大谷派教師資格（住職を務めるにあたり必要な資格）を持っている私のほうがなにかと寺を継ぐのに都合がよかったので父の後を継ぎ住職となった。私が寺の住職をさせて頂いてから何年目のことであっただろうか…。

山形教区第七組での研修会に武田先生をお招きし、研修会を開かさせて頂くことになり、武田先生のお話をお聞きしてからの懇親会でのことである。私も住職になり、法話（ほうわ）をさせて頂く機会も増えたのだが、納得できる法話ができず、どうしたら満足できる法話ができるのか悩んでいた時期である。…というのも、毎回私の法話にはまとまりがなく、自信もなく、一度たりとも満足できる法話ができなかったからである。どうしたら武田先生のようにうまくお話ができるのだろうかと思い、思い切って先生にお伺いしてみた。「先生はお話される時、どのようなことを思ってお話されていますか」と。武田先生は「私も満足のいく話などできておりませんよ。只、私はいつも阿弥陀さんのことを思ってお話をさせていただいています」とスッと答えて下さった。その時は、もや～っと「んん～、お話をされる時のコツとかではないのだなあ…」と感じたことを覚えている。心の中に先生のそのお言葉は印象的に残った。

私は晩婚で、四〇の歳で結婚した。主人は一回り下の二十八歳だった。結婚して一年ほどしてそろそろ子供が欲しいと思った。自然にまかせていたのだが、子供を産むには多少高齢だとも思ったので、不妊治療でも実績のある山形大学医学部付属病院の産科婦人科の不妊外来に行った。その外来で、お医者さんから「奥山さん、正常に妊娠可能かどうか検査しましょう。でも、四十一歳で自然妊娠する確率はわずか〇・〇七％～〇・一五％ですよ。検査の結果、正常に妊娠可能であれば、すぐ不妊治療にとりかかりましょう。」と伝えられた。私は愕然（がくぜん）とした。無知であった。一〇〇に一もないなんて…。

検査の結果、私も主人も機能的には問題なく、問題は私の加齢のみであった。寺の仕事に加え、平日の仕事を兼務している状況で、病院まで片道一時間三〇分。治療に必要な注射を打つため、また、治療のため、つらい雪の時期も何回通っただろうか。今思えば、よく通ったものだと感心する。必死だった。とにかく私には残された時間はないのだ。時間が経てば経つほど加齢により妊娠の可能性は低くなるのだから。

主人の協力もあり、人工授精を繰り返したが、妊娠には至らなかった。結果を聞くときはいつも不安で、眠れない夜を過ごした。結果がだめだったと聞き、何度も泣き、落ち込んだ。先生から費用がかかるが、体外受精をしてはどうかと勧められた。体外受精でも成功率は七～八％。当時は体外受精にかかる費用は事前注射も含めて約三〇万円ほど。それに対して県からの助成金は一年間で一〇万円が限度だった。人口受精を何度も繰り返した上、さらに体外受精を何回も繰り返す財力と時間もなく、体外受精は二回挑戦し、いずれも妊娠には至らなかった。主人はもともと無口なほうで（アルコールが入ると

とても楽しくなるのだが・・・）不妊治療をしている時も特に励ましの言葉もなかったような気がするが、私が辛くて泣いている時は余計な言葉を発することもなく、静かに見守ってくれた。なにも言わなかったがそれを私は主人の愛情なんだと感じていた。主人は子供好きであったし、子供を望んでいたと思うが、私を責めることもなく、只々静かに見守ってくれたのがとても有り難かった。

不妊治療を終え、それに伴い妊娠も諦めたのだが、しばらく辛い日々を送った。まわりをとりまく環境のなかで、自然と子供の話になった時に会話に入っていけない寂しさ。気を遣っていただいても心苦しい感じ。ニュースの中で、親が子供を虐待した、捨てた、殺したと報道される度に、なんでこの痛ましい命が私のところに来てくれないのだろう。私のところに来てくれてたら精一杯の愛情をかけてあげられたのに…と悔しい気持ちに何度なったことだろう。幼い時は、子供はコウノトリが運んできてくれるものだと本当に思っていた。子供を授かるというのがこんなにも困難なことだとは想像もつかなかった。なんで、どうして、どうしよう。しょうがない、これがご縁だと素直に思えなかった。

時間が解決してくれるということは、あることなのか、ないことなのか。私にとっては、やはり時間が必要であったのだろうと思う。時間が経って、なんとなく、子供を授からなかったことが仕方ない、しょうがないと思えるようになった。仕方ない、しょうがないとは諦めの気持ちであり、マイナスな感じもあるが、そう思わないと前に進めない感じがした。

七カ月前、我が家に新しい命が加わった。猫のアン(Anne)である。名前は主人が命名した。「赤毛のアン」が好きなのでその名前をつけた。ずっと猫を飼いたかったのだが、両親の許可がおりず、飼えなかったが、やっとお許しが出たので飼うことにした。主人とも、飼うなら保護猫を…と思っていたので、保護猫を紹介してくれるサイトを見て、この猫可愛いねと見ていたが、先約で希望している方がいらっしゃったので、別の猫を希望し、下見に出かけた。紹介してくださる所に行ってみたら、最初に希望していた猫の受け取りがキャンセルされたと聞き、これもご縁だと思い、その猫を希望し、ワクチン接種の下準備もできたということで引き取りに再度出かけた。その猫はビニールハウスで繁殖し、一年半野良猫として育ったこともあり、性格は臆病であるようだと紹介して下さる方がおっしゃる通り、コロコロと懐かず、逃げられたりして、連れてくるのに苦労した。引き取る時に印象的だったのは、保護してくださっていた石川さんという方の「チョロ(仮名)、幸せになれよ」というお言葉だった。普通は、「可愛がってもらってね」という感じなんだろうけど、「幸せになれよ」という響きに深い愛情が込められているなあと感じた。

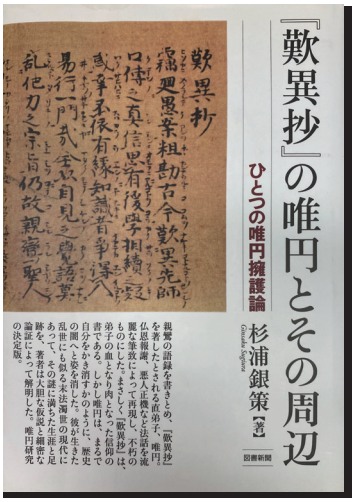
アンが家に来て七カ月、まだ警戒心はとれず、膝の上には乗ってくれないが、私はもとより、主人、両親にもメロメロに可愛がられ、アン中心の生活になった。冬の厳しい雪かきをした後でも家に戻りアンと一緒にいると癒された。アンは家中の愛情を一身に受け、すくすくと太っている(笑い)。

私は子供には恵まれなかったが、人の人生、いろんな形があり、どこにも、普通とか間違いとか正解とか、勝ちとか負けとか、私の意識下で凝り固められたものなどなにもないのだということを心の底から感じ、逆に、思い通りいかない人生であるからこそ阿弥陀さんと語りあえるのではないのかなあと素直に思えるようになった。

武田先生が、懇親会での私の質問に対して、お話をなさる時、阿弥

陀さんのことを思ってお話をなさるとお答え下さったことが私の中に響いてきた。阿弥陀さんはいつも私と共にあり、阿弥陀さんと常に語らいながら歩んでいく人生でありたいと思う。今日も私は阿弥陀さんとおしゃべりをしている。

■私が「山形」とご縁を結んだのは、かれこれ二〇年以上前になります。当初は山形教区主催の若手の会に伺っていましたが、そこでご縁を頂いた方々がやがて組の中心になり、地元に私を呼んでくれるようになりました。通い始めた頃は、山形新幹線ができたとは言え、片道三時間以上もかかるので「遠いなぁ」と感じていましたが、現在では「もう着いたんだ、近すぎるなぁ」に変わってしまいました。こころの距離は、物理的な距離を縮めるのですね。今回執筆いただいた奥山さんは、いつもご夫婦で聞法会に参加されます。そこで見せてくださる優しい笑顔が特に印象的です。しかしあの笑顔の奥に、これほどの御苦労があったのかと、小生の鈍感さを罪深く恥じました。よくぞここまで赤裸々にご自身の内面を書いて下さいました。頭が下がると同時に、この文章は誰に向けて書かれたのだろうかと思いました。そして出した結論が、「これは人間に向けて書かれた文章ではない！間違いなく阿弥陀さんだけに向けて書かれた文章だ！」です。ですから、読後感想は阿弥陀さんから頂くしかありません。人間界では、結婚すれば子どもができるのが「当たり前」です。ただこの「当たり前」の通じない世界が、人間界の外には厳然としてあるのです。そこは阿弥陀さんの世界ですから、阿弥陀さんとたった一人で問答していくしかありません。ただ救いは、阿弥陀さんが人間の出した結論を、ことごとく解体して下さる「有り難い仏様」だということです。　住職



『白鯨』で有名なメルビルの研究者であった杉浦銀策さんが六月三日（八十七歳）に逝去された。杉浦さんには、『『歎異抄』の唯円とその周辺』（貸出可）という著作もある。その「知」を一つもひけらかすことのない「朴訥な賢人」でした。ここに謹んで生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

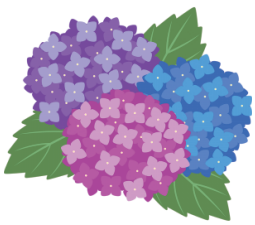
新盆合同法要

7月4日（日）兼 ご命日の集い

午後2時～4時頃まで（受付1時開始）

この一年間に、お身内を亡くされた方々を追悼し自分自身を振り返るご縁にしていただければ幸いです。

新盆合同法要懇志　お一人様　３０００円
※コロナ対策につき一家族二名様まで
ご命日の集い懇志　お一人　５００円



★因速寺　掲示板★

◆写経の会◆

門徒・檀家で有る無し不問です

毎月1回　午後1時30分～4時頃まで
（お勤め＋座談含む）

開催日：7月21日（水）8月は夏休み
9月8日（水）10月13日（水）

教材：正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経（上下巻）

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行（おつとめ）をします。お菓子とお茶を飲みながら車座になり座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。非日常を味わってみませんか？どなたでも参加可能です。

研修冥加金：初回は三千円（教材費込）
二回目以降五百円

朝からゆったり、寺ヨガ教室

毎月奇数週の木曜日午前10時30分～
冥加志　八百円

7月
8日（木）
29日（木）

※ご参加ご希望の方はお寺までお問合せ下さい。
月により中止や日時の変更などございます。

◇ブッディ・サロン◇
【輪読会】

門徒・檀家で有る無し不問です

一冊の本をみんなで輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、語らう会です。参加される皆さんは職種も様々、住所も様々、なにも強制されることはありません。様々な本を通してそこに流れている〈ほんとう〉に触れるのが会の趣旨です。どうぞご参加下さい。どなたでも参加可能です。

●下半期の開催日　午後四時スタート
●冥加志：お一人千円　※遅刻・早退自由です♪
●日　程：7月25日（日）　8月22日（日）
9月26日（日）　10月はお休み

◇ご命日の集い◇

門徒・檀家で有る無し不問です

毎月のご命日のかたを縁として仏法を聴聞する集いです。
やがて私自身も、この世を去っていきます。
みすみす死ぬのになぜ生きるのか？
人間の根源的な問いに、あなたならどう答えますか？

開催日：7月4日(日)兼新盆合同法要
10月31日（日）兼報恩講

内　容：読経（焼香）＋法話（住職）

冥加志：お一人五百円

ニュース【news】

New!

住職新刊本発売

まっさん塾　講演録シリーズ
第九巻　『相互救済物語』

実費冥加金５００円

二〇一九年一〇月に三重県・桑名別院で開催された「まっさん塾」の講演録です。「我を助けずんば佛ならず、佛を助けずんば我ならず」を「相互救済」という言葉で表現した書

〈因速寺護法会費のご報告〉

二〇二〇年度決算報告

総収入	15，488，793円
（前年度繰り越し金を含む）	
総支出	11，248，748円
次年度へ繰り越し	4，240，045円

二〇二一年四月一日現在

詳細は掲示板をご覧下さい。

北側塀再建工事完了のお知らせ

四月八日に始まったブロック塀の再建工事が二八日に無事完了いたしました。松井建設さんにより、既存のブロック塀をブロンズ色のフェンスに造り変えていただきました。尚、再建工事に際しまして、ご寄付を頂戴いたしました御門徒の皆様には篤く御礼申し上げます。

住職

雑言雑語

一年前を振り返るとずっと鬱状態で苦しんでいた。時には明るく振舞うこともあったが、落ち込むこともあった。これは二十代の頃から、そうであったような気もする。現在は、鬱状態に近い平面を歩いている感覚だ。法務も勤めているが、いまいち調子が出ない。昔は口を開けば出てきた言葉も、いまは出てこない。これは困った。ああ阿弥陀さんに申し訳がないと思いつつ、くすぶり続けている私がいる。

定志

表紙画題

『てるてもも』

武田美輪（坊守）

『よびごえ』一二九号
発行所　因速寺（真宗大谷派 本山 東本願寺）
〒136-0074 東京都江東区東砂1の4の10
TEL(03) 3644-0986 FAX(03)3648-4391
Email info@insokuji.com
HP https://insokuji.com
編集／発行　武田 定光　Takeda Jyouko
発行日二〇二一（令和三）年七月一日
Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan